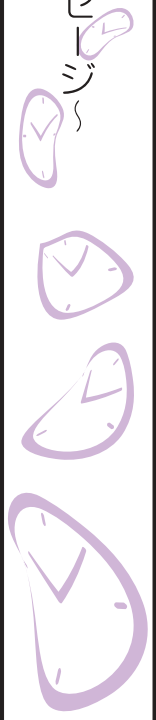


とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



第77回

唐子のすがた

今回紹介するのは、金地に鮮やかな色彩で描かれた、新春にふさわしいきらびやかな屏風です。一雙で対をなし、右隻は香山九老、左隻は群仙をあらわしています。

作者は江戸時代前期に京で活躍した狩野永納。永納は、桃山期の初代山楽を祖とする京狩野家の第3代で、昨年当館の展覧会で紹介した9代永岳の祖先にあたります。京狩野家は、この画のような、極彩色の華やかな画風をお家芸として代々受け継いでいきました。

制作当時は、「香山九老図」に対応する、もつと気の利いた画題で呼ばれていたことですが、今となっては分かりません。

もともと成立背景の異なるふたつの画題ですが、いずれの画にも、唐服をまとうて唐子まげを結った「唐子」の姿を目にすることが出来ます。これらの例のように、唐子は、高士や仙人に仕える姿で描かれることが多々見受けられます。お酒を注いだり食事の準備をしたり、高士や仙人の持ち物の杖や七弦琴を持つたりと、甲斐甲斐しく仕える姿は、愛らしいだけの子どもとは異なる、凛とした魅力があります。

唐子にはまた、子孫繁栄という吉祥の意味もあります。中国の画に、百人という多くの子どもたちが遊戯をするさまを描く「百兒図」というもの



左隻中央に見える唐子

写真の屏風は、彦根城博物館テーマ展「唐子のすがた」で元日から1月28日(火)まで展示します(期間中無休)。

香山九老・群仙図 狩野永納筆 (彦根城博物館蔵) 小倉美津子氏寄贈
上段が右隻、下段が左隻

